
批評と紹介

マリー・ファヴェロー著

『ジョチ・ウルスとマムルーク朝：同盟の誕生』

山下 智也

13世紀後半、ジョチ・ウルスのベルケ（在位1257–1267）とイルハン朝のフレグ（1265没）の間で対立が生じると、その影響は各地に波及した。なかでも、イルハン朝と緊張関係にあったマムルーク朝スルタン・バイバルス（在位1260–1277）は両者の対立を知ると、ベルケに使節を派遣し、ジョチ・ウルスとの友好関係を模索した。ベルケがバイバルスに対して好意的な反応を示し、彼との提携を決断したことは、モンゴル帝国の解体をも意味する重大な画期であった⁽¹⁾。以降、マムルーク朝とジョチ・ウルスの関係は少なくとも15世紀前半まで継続され、黒海・東地中海地域の外交における機軸の一つとなった。

現在パリ・ナンテール大学の准教授である著者マリー・ファヴェローは、ジョチ・ウルス史を専門としており、特にイスラーム世界との関わりに着目した研究を発表してきた。本書は、マムルーク朝とジョチ・ウルスの関係の初期段階について詳細な分析を行ったモノグラフで、実に半世紀ぶりに刊行された両国関係の専著である⁽²⁾。

以下、本書の目次を示した上で内容を概観する。

序論

第1章 微視的文脈

第1節 史料

第2節 外交の初期段階（1261–1264年）

第3節 書簡の内容

第2章 2つの世界の仲介者

第1節 交流の当事者

第2節 コミュニケーション手段

第3章 巨視的文脈

第1節 遺産と衝突

第2節 セルジューク朝領の喪失

第3節 コーカサス突破の失敗

第4節 封鎖の強行：ビザンツの手段

第5節 奴隷貿易

結論 7つの提案

まず序論では、本書を貫徹する仮説、1. ジョチ・ウルスとマムルーク朝の同盟は単なる表面的な友好関係ではなかった、2. イスラームはこの同盟の決定的な要因であった、という2点が提示され、その検証が本書の目的として定められる。

続く第1章は、マムルーク朝とジョチ・ウルスの使節派遣についての具体的な経過を提示することを目的とする。

第1節は史料解題である。ここではまず、マムルーク朝側の主要史料であるイブン・アブド・アッザーヒル（1292没）の『バイバルス伝』を、別系統の情報を提供する史料によって補完しながら分析するという基本方針が示される。一方、ジョチ・ウルス側の史料の欠落については、マムルーク朝史料のバイアスを取り除くことで適切な情報を取り出し、補填するという指針も掲げられる。

第2節では、著者が設定した1261年から1264年の期間において両者から派遣された者たちが分析される。つまり、①1261-62年にバイバルスがベルケに対して派遣したアラン人商人、②1262年10月に亡命軍事集団「ワーフィディーヤ」としてマムルーク朝に到来したベルケの臣下、③同年11-12月のバイバルスからベルケへの使節、④1263年5月にエジプトに到着したベルケからバイバルスへの使節、⑤1263年7月のバイバルスからベルケへの使節である（以下丸番号はこれらに対応する）。ここで示される使節派遣の経過は、先行研究とほとんど同様ではあるものの、ワーフィディーヤが事実上、使節①に対するベルケからの応答であったと指摘している点に独自性が認められる。

第3節では、バイバルスとベルケが交わした書簡が分析される。まず第1項は使節①が持参した書簡を扱う。ここでは、バイバルスが書簡のなかで、ジハードをイスラームの柱と位置づけた点に注目し、彼が自身の軍事

的成功から正統性を導き出す言説をベルケに対して提示したとする。そして、こうした言説には、バイバルスの弱みであった血統をめぐる問題の重要性を相対的に低下させる意図もあったと指摘する。第2項ではまず、ベルケがセルジューク朝やホラズムシャー朝の遺産を活用することで、イスラームを基盤として、正統性の確立を試みたことが示される。そのうえで、彼がマムルーク朝へ使節を派遣した目的の一つは、自身のスルタンとしての地位について、カイロにいるカリフから承認を得ることであったと論じる。第3項は、ウンマの指導権をめぐるバイバルスとベルケの間の潜在的な摩擦に着目した項である。著者は書簡の分析を通して、バイバルスがカリフや聖地といった自身が特権的に利用できる要素を前面に押し出したのに対し、ベルケは自身の改宗がもたらす影響力の大きさを誇示することでその優位性を主張したと指摘している。同時に、こうした摩擦はフレグの排除という共通の目的によって封印され、顕在化しなかった点にも注意を払っている。第4項において著者は、バイバルスとベルケの間の書簡のやり取りを、フレグに対する共同作戦の立案過程として再評価している。これは先行研究が共同作戦の不発ばかりに着目したのとは対照的である。

第2章は、マムルーク朝とジョチ・ウルスの交流を仲介した人々、およびその交流の具体的な手段を主題とした章である。

まず第1節は両国を往来した人々を分析対象としている。第1項では、バイバルスとベルケが派遣した使節の地位や能力に焦点が当てられる。これらの分析を通して著者は、両君主が、イスラーム法・言語・地理といった実用的な能力を有し、かつ行政的・宗教的に名誉ある人物を使節として選出したと指摘する。第2項では、使節①において重要な役割を担ったアラン人について分析を行い、彼らを選出された理由はその言語能力や商業的関心のためであったと指摘する。この項の多くはA. アレマニーの研究⁽³⁾に依拠しているものの、この外交関係の文脈でアラン人について詳細な検討を行った先行研究は他になく、本書の特色の一つと言える。第3項では初めに、マムルーク朝におけるワーフィディーヤの受容をめぐるR. アミタイや中町信孝などの議論を概観する。著者自身の立場は前者により近く、マムルーク朝内において彼らが獲得した社会的地位は限定的であったとしている。その一方で著者は、ワーフィディーヤの外交的側面を強調しており、彼らのマムルーク朝への到来は両国関係における重要な画期であった

と指摘している。

次の第2節はこの外交関係における両国のコミュニケーション手段を対象とする。第1項では、両国の間で交わされた書簡や、使節と君主の面会における言語状況が分析される。ここで著者は、モンゴルの侵攻以後のイスラーム世界においては、アラビア語やペルシア語だけでなく、テュルク語もまた重要な位置を占めていたと結論付ける。第2項における主たる分析対象はバイバルスからベルケへの贈り物である。そこには、クルアーンや礼拝用の絨毯といったイスラームに関する品や、珍しい動物、貴重な物品が含まれており、これらはジョチ・ウルスのエリート層を宗教的に惹きつけ、経済的に満足させるものであった。加えて、著者は贈り物を「強制的な貸付」と表現し、暗黙の裡に同等の対価を要求するものとしての側面を強調している。第3項では、『バイバルス伝』などに残される使節③の旅の記録をもとに、地中海・黒海を渡る経路の分析がなされている。基本的には史料の内容紹介としての色合いが強いものの、各所に詳細な説明を記した註釈が付されており、使節派遣の全体像を把握することを可能としている。

第3章は、マムルーク朝とジョチ・ウルスの同盟に関与した諸勢力に光を当てる。とりわけ、ベルケとフレグの対立というモンゴル帝国内部の文脈に着目することで、先行研究では未詳である、この同盟に対するジョチ・ウルス側の動機を明らかにする。

第1節では、モンゴル帝国の征服地における権益をめぐるベルケとフレグの対立が考証される。特に、著者が「経済戦争」とも評する両者の経済的対立が説明され、その結果として、ジョチ家はアナトリア、トランスコーカサス、ホラーサーンにおいて権益を喪失することになったと論じられる。

第2節ではアナトリア情勢に焦点が当てられる。ジョチ家はルーム・セルジューク朝スルタン・イッズ・アッディーン（在位1246-1260）に対する支援を通して、アナトリアへの影響力を保持していた。しかし、フレグが彼を追放したことで、ジョチ家はアナトリアを喪失するに至る。この点を踏まえて著者は、ベルケがバイバルスへの書簡でイッズ・アッディーンへの援助を依頼した背景には、アナトリアを回復する目的があったと指摘する。加えて著者は、イッズ・アッディーンを、バイバルスやベルケへの使節派遣を通じて、フレグへの対抗を積極的に模索した動的な存在として

再評価しており、この点は特筆すべきである。

こうした議論を経て、第3節で著者は、フレグに対するベルケの遠征の目的は、コーカサスを確保し、タブリーズなどから得られる経済的利益を維持することであったと論じる。そして、この遠征が失敗に終わった結果、ジョチ・ウルスは経済的苦境を脱するために、マムルーク朝やビザンツの援助が必要となったと指摘する。

第4節は、マムルーク朝とジョチ・ウルスの仲介役を担っていたビザンツについて論じた節である。第1項では、1261年秋から1262年夏の間マムルーク朝とビザンツの間で締結された協定が扱われる。著者はこの協定について、ジョチ・ウルスを加えた3者の間で、ボスポラス・ダーダネルス両海峡を越えて、使節や商人を自由に往来させる試みの一環であったと主張する。第2項ではまず、ビザンツ皇帝ミカエル8世（在位1259-1282）が親フレグ政策をとったことが示される。これは、黒海貿易を支配することで経済的自立を築こうとしていたジョチ・ウルスにとって、看過できないものであった。この点から著者は、ジョチ・ウルスがビザンツに侵攻した目的は、ドナウ川下流域に拠点を設置し、ジョチ・ウルスとその同盟国に対して海峡の自由航行を保証することであったと指摘する。

第5節では主にマムルークを扱う奴隷貿易について論じられる。第1項では、13世紀後半において、ジェノヴァが奴隷貿易で果たした役割が再検証される。その結果、著者はアミタイの学説⁽⁴⁾を支持し、1290年代以前におけるジェノヴァの役割を過大評価すべきではないと結論付ける。第2項では、フレグの支配下となったアナトリアに代わり、コンスタンティノープルが奴隷貿易の経由地となる過程が描かれる。そのなかで著者は、奴隷の調達や輸送において、黒海沿岸の現地住民が重要な役割を担っていたことを明らかにする。加えて、こうした貿易に携わる人々の多様性が、商人たちの間で厳しい競争を引き起こすことになったと論じる。第3項ではまず、伝記では秘匿されたバイバルスの経歴に関する情報の分析を通じて、マムルーク朝がジョチ・ウルスと同盟を結んだ主な動機はマムルークの確保であったと指摘する。その上で、一事例としてバイバルスの経歴を追いながら、現地住民の役割を再確認し、彼らの存在がこの同盟において重要であったことを明証している。

以上の分析をもとに、著者は7点の結論を提示する。1. マムルーク朝と

ジョチ・ウルスの関係は、同盟関係として双方にとって必要不可欠なものであった。2. イスラームはこの同盟の決定的な要因であった。3. ベルケとフレグの対立は領土的な問題によるものではなく、商業資源や税収の支配をめぐるものであった。4. ジョチ・ウルス、マムルーク朝、ビザンツの3勢力はそれぞれが同盟を必要としていたという点において均衡が取れており、そこに何らかの主従関係を見て取ることはできない。5. 13世紀末以前については、奴隷貿易におけるジェノヴァの役割を過大評価せず、むしろ黒海沿岸の現地住民の役割に着目する必要がある。6. ジョチ・ウルス、マムルーク朝、ビザンツの間で外交的な緊張や対立が生じて、奴隷貿易は継続された。7. マムルーク朝とジョチ・ウルスの同盟関係の存在意義は軍事作戦や領土問題に還元されるものではなく、資源の支配とモノ・動物・人の循環にこそ求められる。

本書の意義は、分析視点の多角化を通して、マムルーク朝とジョチ・ウルスの同盟について再評価した点に求められる。従来の研究の視座が、史料状況の影響からカイロ中心史観に陥りがちであったのに対して、著者はモンゴル帝国やジョチ・ウルス内部の文脈から分析を加えることで、こうした視座を相対化した。さらに、君主やエリート層だけでなく、マムルーク朝とジョチ・ウルスの関係に関与した多種多様な人々にも着目し、彼らの役割を描き出すことに成功している。これらの多角的な分析の結果として、著者は、両国関係の核心は資源の支配とモノや人の自由な循環であったという独自の見解を提示する。つまり、経済的な側面に意義を見出すことによって、マムルーク朝とジョチ・ウルスの関係を同盟として再定義したのである。こうした著者の見解は、両国が軍事的な成果を上げられなかった点から、両国関係を同盟と見なすことに否定的な見解を示してきた従来の研究⁵⁾に対して修正を迫るものであると言えよう。

一方で、本書の論証を揺るがす問題点を1点指摘することができる。まずはその前提となる状況を説明する。1263年にエジプトを出発した使節⁵⁾はコンスタンティノーブルにおいて、ミカエル8世による妨害を受けた。その結果、使節の一員であったファーリス・アッディーンという人物は2年間、つまり1265年に至るまで拘留されることになった。拘留期間中にジョチ・ウルス軍によるビザンツへの侵攻が起ると、彼は両者の仲裁役を担い、その見返りとして拘留を解かれたとされる⁶⁾。こうした一連の出来事

は、マムルーク朝、ジョチ・ウルス、ビザンツの3勢力間の関係が停滞する原因となった⁽⁷⁾。

本書の問題点は、この拘留と侵攻について十分に検討していない点である。I. ヴァーシャーリは、このビザンツ侵攻にジョチ・ウルスは主体的に関与していなかったと指摘しており⁽⁸⁾、これは侵攻の目的が海峡の自由航行を確保することであったとする著者の見解の妥当性を損ねうるものである。それにもかかわらず、著者はこの指摘を検証することなく自身の見解を提唱し、さらには、同盟の核心がモノや人の循環にあったとする本書最大の主張における重要な論拠の一つとしているのである (pp.115-116)。

この問題は1261年から1264年という本書の時代設定が不相当であるために生じている。上述のように、一連の出来事は1265年まで続くものであり、その時代範囲のなかで、拘留と侵攻について連関させながら分析がなされるべきである。しかし、本書中にファーリス・アッディーンの名前が登場しないことから明白なように、著者は両事件の連関性を軽視しており、かつその詳細な分析も行っていない。したがって、著者の主張については、ヴァーシャーリの見解も考慮に入れながら、その妥当性を検証する必要があるだろう。

以上若干の問題点を指摘したが、本書がマムルーク朝—ジョチ・ウルス関係の最初期を精緻に考察した重要著作であることは間違いない。従来、13世紀後半のマムルーク朝外交史研究では、イルハン朝や十字軍国家との関係に軸足が置かれ、ジョチ・ウルスとの関係は必ずしも中心的ではなかった。しかし今後は、マムルーク朝—ジョチ・ウルス関係史を発展させた本書の功績を始点として、両国関係の通時的な研究が一層進展するだろう。

註

- (1) Peter Jackson, "The Dissolution of the Mongol Empire," *Central Asiatic Journal* 22, no. 3/4 (1978), 237-38.
- (2) 本書の書評には以下のものがある。Denise Aigle, "Marie Favereau. La Horde d'Or et le sultanat mamelouk: Naissance d'une alliance," *Abstracta Iranica* 40-41 (2019), <https://journals.openedition.org/abstractairanica/50397> (最終アクセス2022年4月25日)。

しかし、これは内容紹介を主としており、評論にまでは及んでいない。

そこで、本書評では、内容紹介と批評をより仔細に行う。また、以下の論文は、本書の内容を著者自身が簡潔にまとめたものである。併せて参照されたい。Marie Favereau, “The Golden Horde and the Mamluks: The Birth of a Diplomatic Set-Up (660–5/1261–7),” in *Mamluk Cairo, a Crossroads for Embassies: Studies on Diplomacy and Diplomatics*, ed. Frédéric Bauden and Malika Dekkiche (Leiden: Brill, 2019), 302–26.

- (3) Agustí Alemany, *Sources on the Alans: A Critical Compilation*, Leiden: Brill, 2000.
- (4) Reuven Amitai, “Diplomacy and the Slave Trade in the Eastern Mediterranean: A Re-examination of the Mamluk-Byzantine-Genoese Triangle in the Late Thirteenth Century in Light of the Existing Early Correspondence,” *Oriente Moderno* 87, no. 2 (2008), 351–57.
- (5) 例えば、以下のものがある。Reuven Amitai-Preiss, *Mongols and Mamluks: The Mamluk-Īlkhānid War, 1260–1281*, Cambridge: Cambridge University Press, 1995, 78–91.
- (6) Quṭb al-Dīn Mūsā b. Muḥammad al-Yūnīnī, *Dhayl mir ’āt al-zamān*, vol. 1, 1954, 537–39.
- (7) Amitai-Preiss, *Mongols and Mamluks*, 91–93.
- (8) István Vásáry, *Cumans and Tatars: Oriental Military in the Pre-Ottoman Balkans, 1185–1365*, Cambridge: Cambridge University Press, 2005, 75.

Marie Favereau, *La Horde d’Or et le sultanat mamelouk: Naissance d’une alliance*, Cairo: Institut Français d’Archéologie Orientale, 2018, x+176p.

(九州大学大学院人文科学府修士課程)